

島崎藤村―その一側面

―「新生」をめぐる―

佐藤泰正

「新生」論に入る前に、ひとつの挿話を記しておこう。丹羽文雄の文中に次のような言葉があった。

ある作家と話している裡に、彼の身辺に、ある不幸な出来事があったことを知り、自分はそれを是非小説に書くことを勧めたが、彼はどうしても書かないと言う。自分なら必ず書いているだろう。なるほど、それによって身近かに迷惑を受ける者や困る人も、出て来るかもしれない。然し、それがなんであろう。どんなことであろうと、最も深く傷つく者は、先ず自分自身だ。「自身を組上にのせることほど壮絶なことはない筈だ」―大体このような意味の言葉であった。ここで軽口を叩かせてもらうならば、「ブルータス、おまえもか」―私は思わず、苦い嘆息を覚えざるをえなかった。日本の自然主義文学発生前来の亡霊が、どうやらここにもまた執拗につきまといっている。

以上は、実は旧稿にすでに記した一節であるが、もはや気づかれただであらう―私がここで想い浮べていたのは、丹羽氏の「菩提樹」や藤村の「新生」であり、とりわけ「新生」中の一節、あの姪の節子との不倫の事実を作品に發表したことに對する主人公自身の言葉であった。

節子の姉の輝子が岸本の許に來て言う、あんなことを書いて、誰だって叔父さんの為に惜まないものはない。よくよく考えた上でのことであらう。叔父さんは自分でなすつたことを書かれるんだからそれでいいかもしれぬ。然し、「唯妹さんが可哀さうだ」と、何処へいっても聞かされる。「節ちゃんを奈何して下さいませ」。輝子の烈しい糺問に對し岸本は、あれは節子が承知の上での發表だと言い、尚も問い迫る輝子に對して次のように言う。

「さうお前達に心配を掛けて、それは俺も済まないと思ふ。しかし、誰が迷惑する、ツて言つたつて、一番迷惑するのは俺ぢやないか」(傍点筆者)―ここにはまぎれもなく作家のしたたかなエゴイズムがあり、最も深く傷つく者は自分であり、「自身を組上にのせることほど壮絶なことはない」という、あのしたたかな文学的誇負がある。恐らくこの一語の裡に、「新生」の一切は集約的に示されているといつていい。

芥川の言を引くまでもなく、ここに「果して『新生』はあったのであらうか?」。尠くとも節子にはなかつたとは、多くの評家の言葉だが、まさしくここにみるものは、一切を犠牲にしても、いかにかして生きんとする、すさまじいまでの作家的エゴイズム、執念の記録であり、これに較べれば後半に描かれる愛の誠実、靈的な愛への

悟達などとは、もはやなにもでもあるまい。ここに差出されたこの一篇の長大な告白の前に、我々もまた藤村流に言うならば、様々な感慨を覚えつつも、深い溜息を洩らさざるをえない。

周知の如く「新生」は、その第一部は朝日新聞紙上に大正七年五月一日から十月五日まで、第二部は翌八年四月二十七日から十月二十三日まで掲載されたものであり、作者四十一才（大正元年）から四十七才（大正七年）に亘る七年間の生活を素材とした自伝的作品である。内容は記すまでもないが、四十才を過ぎて妻を失った岸本捨吉が、家事手伝のために同居していた姪の節子と不倫の罪を犯し、妊娠を知ってその仕末を兄に托してフランスに逃れる。欧州大戦に出会い、その変転のさなかに新生への契機をつかんで帰国するが、再びふたりの関係はもどり、いまは愛の誠実の裡に罪を贖い、宗教的愛の世界へ進まんとする。岸本はこの不倫の事実を告白する小説を書くことによって自らを救わんとし、節子は台湾の伯父の許へひきとられてゆく。

この「新生」第一部を「懺悔の書」、第二部を「福音の書」とは瀬沼茂樹氏の言葉であり、氏は第二部が第一部脱稿後約半年のうちに着手され、大正八年四月から発表されたこと、また第一部が前年の五月から十月迄連載され、「同年十一月朔日（『新生』による）」に、こま子は台湾に向って去っている」という事実によれ、これは第一部が「対世間的な顧慮」から、その過誤に対する「倫理的苦悶」と人間的苦行との記録」即ち「懺悔の書」として書かれたが、第二部は第一部発表の反響が十分にわかったうえで、もはや世間への顧慮や遠慮を不要とし、いわば居直って、二人の異常な関係にひそむ

精神的意義の高揚、即ち「福音の書」として「強引な合理化」を試みたものと目されている。これは一部、二部両者の関係を説明するものとして妥当一般の見方である。然し果してこれを懺悔、福音の書とよぶことが妥当であるのか。尠くとも懺悔とよび、贖罪というに足るものであるのか。仔細に辿ってゆくならば、我々は彼（以下、これを岸本と作者自身を重ね合せたものとして使う）の事件からフランス行への足取りに、それとは異った志向のあとを、おのずから読みとることが出来る。

周知の如く事件の発端は一切描かれず、ただ第十三章の冒頭に至り、節子が岸本に妊娠の事実を告げることによって、すべてがはじめて明るみに出される。皮肉なことだが、確かに事件はここに始まったといつていい。彼は苦しみで沈んでいる節子の姿に「鞭を受け」、悔恨を感じる。然し同時にまた、過去の女性関係から受けた痛手の故に、女を避け、煩わしく思っていた自分が、よりによって「一人の小さな姪のために、斯うした暗いところへ落ちて行く自分の運命を実に心外にも腹立たしくも思ふ」。（傍点筆者）彼は事件を闇に葬るために節子をかくして出産させ、自らはフランスに逃亡する。一切を船中より兄に手紙で打明け、その処置を頼む。彼の旅は隠れた罪を犯したものの「負うべき」「苦難」であると共に、また事件を、自らの罪を闇に葬らんとする逃避行でもあった。

「知らない人の」「中へ行って恥かしい自分を隠すことは、この旅を思ひ立つ時からの彼の心であり」、
「彼は旅に紛れることによつて、僅に心の眼を塞がうとし」た。然し、「一度つけてしまった生涯の汚点は打消すべくもなく」、
「埋めようとするはばするほど、

余計に罪過は彼の心の底に生きて来た」(傍点筆者)。彼はフランスの宿舎にあって時にふと、「兄に手伝つて貰つて人知れず自分の罪を埋めるといふ空恐しさ」(傍点筆者)を思う。私はこの「罪を埋める」という言葉に注目する。「埋める」という一語には、単に忘れさる、消しさるという言葉とは違つた、ある暗い情念が、ひめられた衝迫が蔵されている。それはまた、次の如き箇所にも深くつながるものであらう。

リモオジユにしばらくの職福を避けていた岸本が、再びパリに帰つてのこと、故国から節子の手紙が届く。一度も返事をくれぬ彼に對し綿々たる恨みをのべ、彼のことを思ひ、自分の子供のことを思うごとに、枕の濡れぬ夜はないという。彼は自分の「堅く閉じた心の扉の外に来て自分を呼びつけて居たやうな姪の最後の声を」、「根気も力も尽き果てたかと思はれるやうにその扉を叩いた最後の精一ぱいの音を聞きつけたやうな気が」する。彼は嘆息しながら、その手紙を燂炉に投入する。「見る間に紙は燃え上つて、節子の文字は影も形もなくなつた。岸本は喪心した人のやうに燂炉の前に立つて、投入した紙片が灰になるのを眺めて居た」。

単行本には削除されたが初出稿には次の如き言葉が続く。「さ、かな、火気は節子の手紙を灰にしたのみでは済まさないかつた。いくらか紙片の形の残つた軽い灰は吸はれるやうにして煙筒の中の方へ舞揚つて行つてしまつた」。(傍点筆者)

それっきり節子の消息は絶えたが、やがて二度目の年を異郷に越して、春を迎える翌年二月半ばのこと、再び節子の手紙が届く。この頃の「煩ひ勝である事」「弱くなつたこと」「母親に對して気まづ

い思ひをして居ること」、時には母から幼い弟達の前で、「姉さん」と呼ばずに「お婆さん」と呼ばれ、「岸本の叔母さん」などとよばれることさえあるという。その「傷ましい」(いた)「気でも狂ひさうな調子で書いてよこした」手紙は、「自分故に苦しんで行く姪の姿をまざまざと見せつけ」る。この部分に續いて「百十一章」の冒頭から、次のような一節が続く。

「言ひあらはし難い恐怖と哀憐とは、節子の手紙を引裂いて焼捨ててしまつた後まで岸本の胸に残つた。ずつと以前に岸本が信濃の山の上に田舎の教師をしながら籠り暮した頃、城址しろあとの方にある学校へ行かうとして浅い谷間を通過ぎたことがある。ある神社の裏手にあたるその浅い谷間の水の流のところで、一羽の小鳥を見つけたことがある。飛去りもせずに居る小鳥を捉へるつもりもなく捉へやうとして、谷川の石の間を迫廻すうちに、何時の間にか彼の手にした洋傘は小鳥の翼を打つたことがある。何かに追はれたか、病んで居るか、いづれ訳があつて飛去りもしない小鳥を傷つけたと気がついた時はもう遅かつた。血にまみれながら是方を見た時の眼は小鳥ながらに恐ろしく、その小さな犠牲を打殺すまでは安心しなかつたことがある。そして半町ばかりも歩いて城址に近い鉄道の踏切のところへ出た頃に、手にした洋傘の柄の折れて居たのに気がついたことがある。丁度あの小鳥の眼が、想像で描いて見る節子の眼だ。可憐いたな、鋭いナイフで是方の胸を貫徹くつとさすには置かないほどの力を有つた眼だ」(傍点筆者)。續いてすぐ、次の如き言葉が加えられる。「一度犯した罪は何故斯う意地悪く自分の身に附纏つて来るのだらう、と岸本は嘆息してしまつた」。

亀井勝一郎氏は「新生」を評して、その根本的な欠陥に「『悪魔』の虚構を放棄したこと」をあげている。「『新生』は日本文学上に稀な『悪魔』を登場させる可能性をもつた作品だ」。それはまた同時に「稀な宗教学の可能性を内在させてゐることと同義である」。藤村は作品の上ではメフィストを伴はないファウストだ。彼の内部にはたしかに悪魔が一匹住んでゐるのだ。しかし作品ではひとつの分身、それも自己に密着しすぎた分身しかない。ひとつの分身が悪魔の役をもひきうけようとしたとき、罪悪感としてそれは表現された。ところで罪悪感そのものを更に突き放して客観するもう一つの分身の欠如が、あの頓晦の原因となつたのではあるまいか。「迷へる求道者の造型に力を傾けえたとしても、傍からそれを嘲笑する悪魔の造型は放棄した」。

これは興味ある指摘だが、所詮「新生」の作者には望みえぬ処であらう。然し私は、たとえはいまここに掲げた一節のごとくに、亀井氏の指摘とは別に、冷厳な、あるいは冷酷な作家の眼が意識せずして捉えた、デモニッシュな、生の深い暗部からの衝迫の表現をみる。彼の見えざる内部で、ひそかに彼の手は血にまみれなかつたか。いかにもして生きんとする執拗な生への欲情が、彼の手に血を滴らせなかつたであらうか。「一度犯した罪は何故斯う意地悪く自分の身に附纏つてやまぬのか。この罪を葬るためには「節子と彼と、二人の中の何方か一人が死ぬより外に仕方が無い」とまで考へ」た時、彼がひそかに節子の死を願わなかつたとは言えまい。「罪を埋める」という言葉は、このような暗い情念とあい重なつて、私の心を深く持つ。彼の表現の曖昧さ、頓晦性をどれほど批判しようと

も、その奥からこの生臭い、骨格の太い主人公の影は立上つて来る。「新生」とはまことに特異な、不思議な作品である。

恐らく「新生」のある不可解な、言い難い重さは、作品の奥からせり上つて来る、このしたたかな生命力と、またそれとはうらはらに、藤村特有の象徴的な、重い文体で語られる抒情的な側面とのなごりまじり、ある深い独自の感触にある。パリの描写からリモージュに移つて、そのさびたしずかな風物と心理の交錯の裡に、おのずから新しい心の芽生えを語る部分は、作中の最もすぐれた部分のひとつであらう。特にサン・テアエヌヌの古い寺院の弥撒の情景にみる、中世的なものへの傾きは、アベラアル・エロイズの墓の情景と共に、二部で語られる二人の宗教的な愛の昇華への前提となるものだが、然しここでも彼の心はただ「『永遠』といふものに対ひ合つて居るやうな旅人らしい心持に帰つて行つた」と語られているにすぎない。彼は「あの人間の醜悪を窺つてくした末に」「僧侶に等しい十字架を負ふ人と成つたといふ極端な近代人の生涯」を、また「友人との争闘より牢獄にまで下つた末にデカダンスの底から清浄な智慧の眼を見開いた名高い仏蘭西の詩人の生涯」を想ひ浮べつとも、ついにキリスト教とは無縁であるかにも見える。

亀井氏は、藤村は「宗教の一步手前まできて、宗教よりも作家の強烈なエゴイズムの方を採つた」と言い、「その一步手前の呻吟にこれほど満たされた文学もあるまい」と評しているが、これはまた第二部に描かれる宗教性なるものと無縁ではない。彼の冒した罪過は確かに、「神の前に一度置いてみるべきものであつた」（亀井）。埋めんとして埋めぬ罪へのおそれの前に、この自らの破れの前

に、真の罪との対決がなされるべきであった。然し彼がその前に自らの罪を置き、この命を絶ち給えとさえ祈らんとしたものは、ほかならぬ彼の父であった。ここにもまた「新生」をつらぬく一側面が呈示される。

彼の「半生を通して續りに續った憂鬱——言ふことも為すことも考へることも皆そこから起つて居るかのやうな、あの名のつけやうの無い、原因の無い憂鬱が早くも青年時代の始まる頃から自分の身にやつて来たことを話して、それを聞いて貰へると思ふ人も、父であった。何故といふに、岸本の半生の悩ましかつたやうに、父もまた悩ましい生涯を送つた人であつたから。仮りに父が斯の世に生きながらへて居て、自分の子の遠い旅に上つて来た動機を知つたなら何と言ふだろう……けれども、岸本が最後に行つて地べたに頭を埋めてなりとも心の苦痛を訴へたいと思ふ人は父であつた」。然も彼自身はその言い難い苦しみに「狂じみたといふ程度に踏みこたへた」が、「父のは、それが本物であつた」。然も、父もまた「自分達と同じやうな弱い人間の一人」であり、「誘惑には勝てなかつたやうな行為があつて、それがまた同族の間で起つて来た出来事の一つであつた」ことを知り、彼は自らの罪が、まさしくこのやうな血につながる宿業であることに、運命的な何ものかを感じず。〔藤村の父正樹と異母妹の由俊との関係については、すでに勝本清一郎氏の発言などによって明らかな処である〕。

彼は自らの罪におののき、それを深い宿業の如く感じつつもなお、ついに罪そのものとの対決、自らの破れからの、真の自己否定からの新生は、そこになかった。藤村が後に第二部を廢し、一部の

みを「寢覚め」と改めたことは意味深い。まことにそれは一場の悪夢でもあつたらうか。いま彼はその悪夢の寢覚めから、ようやく身を起そうとする。何処へか——ただ時の力のみが癒してくれるであろう。ようやく旅の終りの時が来た。彼の心に転機が来る。再生への芽が彼にさきやく。

「お前も支度したら可いではないか。濃み果てた生活の底から身を起して来たといふお前自身を、そのまま新しいものに更へたら可いではないか。お前の倦怠をも、お前の疲労をも——出来ることならお前の胸の底に隠し有つ苦惱そのものまでも」〔傍点筆者〕——「お前自身をそのまま」という時、ここに真の自己否定からの、古き我的全的否定からの新生はない。ただ彼は「何よりも先づ自分は幼い心に帰らねば成らない」と呟く。

「死の中から持来す回生の力——それは彼の周囲にある人達の願ひであるばかりでなく、また彼自身の熱い望みであつた。春が待たれた。——この言葉をもって第一部は閉じられるが、「死の中から」の「回生」が、その言葉にも拘らず、もはや真の新生を意味せぬことは、再言するまでもあるまい。

二

「新生」第二部が、第一部の発表後の反響をも踏まえて、真実な愛への再生を宣揚せんとする、より肯定的な意識につらぬかれていくことはすでにふれた。第二部をつらぬくものは、ひとつは肉の苦しみから出発したものを超脱して、靈的な愛の悟達に赴かんとする流れであり、いまひとつは節子の父、兄義雄に代表される世の圧力、世間的道德に抗して、ついに自らの秘密を作品に描くことを通

し、「自己告白による自己救済」という、あの「破戒」以来の（より正確に言えば「若菜集」以来の）根源的なモチーフの顯示に至るまでの流れである。この両者はあい交錯してひとつの流れをなす。

帰国後の節子への愛は、先ず憐みに発し、再びもとの関係にかえてしまいが、然し彼は「もう以前の岸本ではなかった」。もはや宿業の罪になやむものではなく、むしろこの肉の苦しみから出発した愛を、より高い精神的な愛へ昇華させようとする。世間がどのようにならぬかと、最後に残るものは「人と人とのまこと」だ。彼は自身への「愛の誠実」に立って、敢て世の道徳に抗せんとする。

現実には結ばれることの出来ぬ二人の愛は、やがて宗教的な愛にまで昇華してゆく。いや二人の愛というよりも、それは節子の夢みたものであり、彼の手によってそこまで育てしめられたものでもある。聖書が、ルソオの「懺悔録」が贈られる。聖書の言葉が書き贈られ、珠数が交換される。「谷底を滑る音のしない水のやうな」ひそやかな歩みを辿ろうとする、このふたりの男女の上に、ふとかかる円光を我々はいま見ることが出来る。

「巨大な墓石の並び立つ別の光景がまたその小山の上に展げられた。そこには全く世間というものから離れたかのやうな静かさがあつた。

底青い空の方から射して来て居る四月はじめの日の光が二人の眼前に落ちて居た。岸本は自分の右の手を節子の左の手につなぎ合せ、日のあつた墓石の間を極く静かに歩いた。あたかも、この世ならぬ夫婦のやうな親しみが黙し勝ちに歩いて居る節子の手を通し

島崎藤村―その一側面

て岸本の胸に伝はつて来た」。

これは作中最も美しい箇所のひとつであろう。然しこれも作者藤村によって描かれた幻の世界にすぎぬ。「斯の果敢ない幻のやうな心理はすぐに破れた」彼自身すぐ眩くように記す。然しにも拘らず、この幻の世界を、その寂光土にも似た、彼の言う「宗教の世界」へ導いたのも彼自身ではなかったのか。この場面の少し後に、別の日節子を家に迎え、嬉し気にふるまう節子と共に過す場面がある。

「しばらく岸本は縁側に腰掛け、自分の側に節子をも腰掛けさせ、正午近い春の日が庭土の上にあたつて居るのを眺めながら二人ある静かさを楽しまうとした」（傍点筆者）―彼は「二人ある（幻住の）静けさ」と初出稿に記し、その「幻住」の一語を後に取り除いている。作家の眼がそれを「幻住の」世界と見る。然しさらにその奥に光る冷やかな眼は、何を見ていたのか。確かにこの現実には「節子をも腰掛けさせ」る場所は、もはや用意されてはいなかった筈だ。

彼は節子から贈られた珠数を掛けながら思う―「斯うした珠数でも胸の上に懸けて幻の栖所のやうに今の生活を思ふやうな心と、夜も寝られぬほど血の涌くやうな心とが、彼には殆ど同時にあつた」。新生第二部をつらぬくものは、この彼自身の心肉二相の矛盾の糸の織りなす流れである。節子との関係を別の側面より見るならば、まさしく眠りがたいまでの肉の苦しみにつらなるものだ。彼の醒めた眼がいう、結局これは「互の性の饑」にすぎぬものではなかったのか。節子への愛が憐みに発すると共に、またおさえがたい性の衝動に

発することは、たとえば帰国してしばらく後迎えだ夏の大暑に「激変した土地の熱の為に蒸されるやうに成」り、再びあの「彼の内部に潜んで居たもの」が一度に「頭を持ち上げ」、あの暗い衝動に、「この不幸な女と共に」彼は「もう一度試されそうに成つて行きかけた」という言葉にも示されている。それは彼の裡より噴出する暗い衝動であり、節子との靈的な愛への志向にも拘らず、幾度か彼を握え苦しめる。その究極が、さらに一年を経ての夏を迎え、作家としての仕事も、生活も、一切を無に帰せしめんとする如き「恐ろしい情熱」「パッションの激浪」に苦しめられつつも、これを衝き切り、ついに「その夏の『峠』を越した」と書かしたものにたつたっている。

「峠」を越した—ついに彼は「自らの情熱の支配者」となりえた。それは同時に、彼が新しい世界への解放を求めての告白の時でもある。すでに危機はすぎた。一切の準備はなされた。彼は告白によつて一切を解決することを節子に囂る。節子は大した驚きも見せず率直に同意する。

「黙つて置きさへすれば、もう知れずに済むことなんですけれど—わたしにお嫁に来て呉れなんて言ふ人も無くなつて、却つて好いかも知れませんが」—岸本はしばらく言葉もなく、やがて次のように言う。

「お前のやうに直ぐさういう風に持つて行つてしまふから不可—俺はさう眼前めのまえのことばかりも考へては居ない」

確かに彼はもはや「眼前の」節子をみてはいない。その告白が節子の上にかなる事態を生じ、痛みを与えるかを顧みようとはしな

い。彼の心は自らのなきんとする賭けへの期待に領されている。最も傷つくものは、迷惑をこうむるものは、この俺ではないのか。然も敢てこの自己を組上くみあがりにのせることほど壮絶なことはない筈だ。—この賭けへの文学的誇負のみが、彼の心を昂ぶらせる。彼の自己救済のわざは完了した。その発表時の一切の事態をも先取して、作家の自負が、エゴイズムが、斯く誇負せしめる。

彼は自らの告白を節子への愛のためであると言ひ、また「阿爺は斯ういふ人間だつたかと、ほんとうに自分の子供にも知つて貰いたい」ためともいふ。然し眞の作因が別にあつたことは、容易に察せられる処である。平野謙氏がその作因を目して、彼があれだけひたかくしにかくさんとした秘密を、単に芸術的動機のみならず、於て発表する筈はない。その眞の動因は「恋愛からの自由と金銭からの自由」にありと断じたことは、周知の通りである。平野氏はそのあかしを「新生」文中に探つて、次の箇所をあける。

「岸本は誰も家の人の居ないところへ行つて、独りで自分の手を出して見た。そして自分に問ひ、自分に答えた。

『矢張、金の問題が附いて廻る—どうも仕方がない』

岸本はあたかも、手相を觀る占者の前にでも出して見せるやうな手付をして、自分で自分の手を眺めた。その手を他から出された手のやうにして出し直して見た。實際、それは誰の手でも無かつた。自分の罪過そのものが何処から出すともなく出してよこす暗い手だ。

岸本はもう一度その手を出し直して見た。誰にも知れないやうに自己の罪過を葬らうとして居るやうな人間の果敢なきをよく知るも

のでなければ、どうしてそんな手のあることを感じ得られよう。それは押頂いても足りないほど感謝すべき手だ。しかし掛引の強い手だ。自分の弱点を握つて居るやうな手だ。岸本はつくづく自分の手を眺めて、非常に暗い気持がした。(傍点筆者)

一見、藤村流の臍體もろたいで記されたこの文中に、かくされた兄の手を見出した平野氏の洞察は鋭い。事実、初出稿では傍点の部分は次の如くなっている。

「それは苦しければこそ出してよこす手だ。しかし掛引の強い手だ。それは押頂いても足りないほど感謝すべき手だ。しかし自分の弱点を握られてしまつたやうな手だ。」

まぎれもなくここにあるのは兄の手だ。然しまた平野氏はその論中再度この箇所この箇所にふれ、同時にこれがまた藤村自身の手をも示していることを語っている。

「あの手の描写には兄のそれにも通わせ得るものとして成り立っていたが、やはり本質的には藤村の宿命を象徴する藤村自身の掌の描写にはかならない。一管の筆をたよりに、透谷や二葉亭を心の盾として生きぬいてきた「押頂いても足りないほど感謝すべき手」には違いないが、「真心の何物も持たぬ」、エゴイズムのいかなるものかを知悉した「掛引の強い」、「自分の弱点を握つて居る」手でもそれはあった。」

確かにその通りである。彼を捉える兄の手と、からみ合う自身の手と、共に血につながる「かけ引きの強い手」のからみ、もつれあう処に、秘められた告白への動因がある。

兄や節子への顧慮から、初出稿がかなり改められていることはす

で見える通りであるが、ここでも後に削除された文中に、告白への動因と目すべきものは、より明らかに語られている。たとえば前掲の文中、岸本の「矢張、金の問題が」云々の独白に続いて、初出稿では次の如き言葉が挿入される。

「三年の旅の苦しみも、唯自己の鞭を背に受けたといふ丈では、この世の罪を洗ふには足りなかつた」(傍点筆者)

あるいはまた、後に全文削除された初出稿第八十五章中の次の如き言葉―

「兄は自分のために世間の体面を取りつくるつて呉れた人ではあつても、真に自分を赦して呉れた人ではない」「この嘘を取除くことの出来ないかぎり、心から義雄さんを助ける気には成れない」。

あるいはまた別の箇所の次の如き言葉―

「彼が恩義の深い義雄兄の前へ行く時、何日まで経つても被告の位置にあることを忘れることが出来ない。何のためか。三年の旅そのものが嘘でかためであるからだ」。

もはや明らかである。兄とは「この世」に他ならない。彼は「この世の罪」を洗い濯ぐためには、兄の「被告」たることから脱すためには、「この嘘を取除く」以外にはない。彼はこの自身を縛する「手」をとり除くためには、ただ「告白」という血路をえらぶほかはない。ここに「自己告白による自己救済」という動因が、あの自然主義文学発生以来の文学的動因が、彼を支えていたことはいうまでもない。

然し、ここに見る「告白」とは何であろう。その罪が「この世の罪」であり、その被告たるのが「兄の前」、世間の前の被告にす

ぎぬ時、その告白もまた世間に対する、他人に対する告白にすぎぬ。敢て「自身を組上にのせることの壮絶」たる所以であろう。

「もとより彼は不徳の叔父だ。しかし彼は自分より不徳でないと言へる人の手にかかつて、その人の名にこそ打たれたいと思つた。

彼は不幸な節子を憐まずには居られなくて憐んだ。そこまで動いて来た上は、最早最後の審判の前に立つの外はなかつた」(初出稿・傍点筆者)

「人間の生活の真実がいくらかも私達の言葉で尽せるものでなく、又書きあらはせるものでないことを心に潜めた上での人で、猶且つ私の書いたものが嘘だといはれるならば、私は進んでどんな非難に当りもしようが、もともと私は自分を偽るほどの余裕があつてあの『新生』をかいたのでもないし……」(傍点筆者・「芥川龍之介君のこと」)

これらの人間存在の争む矛盾と罪へのおののきに発する言葉が、超絶者の前に自らを置く卑遜の言葉としてでなく、むしろ居直つた自負とも弁明ともひびくのは何故であろうか。ここには、ある深い根源的な欠落がある。「自身を組上にのせる」という時、然し彼を裁くものもまた彼自身であり、自身が自らの上に君臨するという、このしたたかな自我主義、自己肯定を、彼もまたついに避けえてはいない。真に人間を組上にのせるとは、自身が真に問わるべきもの、裁かるべきものとして、自己を超えた何ものかの組上に身を横たえつつ、問いつめられることではないのか。問いつめることと問いつめられることの、その深いもつれの裡に、人間の根源的な意味における倫理性が、宗教性が、その深い面貌を現しつつ、浮び上つ

て来る筈だ。

然し、このような批判にも拘らず、「新生」の持つそのしたたかな手強さ、ずしりとした感触は、何に発するのか。作家の冷厳な、冷酷な眼が彼自身を裏切つて屢々閃光の如く、読者の眼を搏つ。宗教的な愛への精進を説きつつ、自分の女に対する想いや「放肆な想像」を記した文章を読ませ、そのとまどう心に、表情にじつと見える男の姿。台湾行に、岸本から貰つた本を持って行きたいという節子に対し、姉を通して冷たく、そんな甘い生活が待つてはいない、貸すことはできないと言いきる男の姿。最後の電話で「今度はそっちが旅に出掛ける番だね」という、作者特有の詠嘆調の底にひびく恐ろしいまでのひやかさ。こうして二人の愛を成就する「幻住の世界」に旅立つことによつて、現実の節子は完璧に葬られる。

「新生」を評して真実を潮塗し、自己を偽装した作とは屢々評される言葉だが、然し作品はついに作者を裏切ることなく、いや見事に裏切つて、一箇の人間の、作家の生への執念の、そのしたたかな重さをあますなく伝える。「新生」とは、この文学の争む逆説を見事にあかしした稀有の作品といふことができよう。